

1 自己評価及び外部評価結果

(※外部評価はユニット別ではなく事業所全体のものです)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3072500477		
法人名	有限会社 グループホーム 開門荘		
事業所名	グループホーム 開門荘	【ユニット名:開門荘】	
所在地	和歌山県新宮市熊野川町日足752番地		
自己評価作成日	平成23年2月18日	評価結果市町村受理日	平成23年3月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 <http://www.kaiyokohyo-wakayama.jp/kaiyosip/infomationPublic.do?JCD=3072500477&SCD=320>

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 認知症サポートわかやま		
所在地	和歌山市四番丁52 ハラダビル2F		
訪問調査日	平成23年3月4日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

豊かな自然に恵まれた中にある当ホームは、木の優しさを取り入れた建物となっている。さらにウッドデッキから見える四季折々の景色が認知症の方にとってもよい影響を与えていると思っている。また職員もゆったりと時間の流れの中で穏やかに暮らしていただけるよう、相互になじみのある関係づくりとその人らしい生活をサポートしていく心がけている。地域との交流もあり、住民からの関心も高く、外出や散歩時に互いに挨拶ができる環境にある。増設により職員も増え、安定したサービスの質の確保をいかに図るか等の課題も多いが、明るく元気なホームを目指してがんばっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

緑豊かな山並みや田園が見渡せ、木の温もりが感じられるホームである。昨年10月に敷地内の別棟に1ユニットが増設され、ユニット間で隣家のような行き来ができています。リビングから広いウッドデッキに出ると外気の中で四季折々の季節が楽しめ、洗濯物や布団の取り入れなど入居者の力を発揮する場にもなっています。毎月、季節の絵柄の入った便せん担当職員が直筆で入居者の状況を記入し、家族に送ると共に他の職員にも回覧して情報を共有している。ホームの隣は管理者の自宅で、以前から地域とのつながりが深く、もしもの時に住民の協力が得られやすい体制となっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

(※外部評価はユニット別ではなく事業所全体のものです)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域の中で、その人らしく暮らすことの大切さと支援する目的を含めた理念と信条をつくり、事業所内に掲示するとともに、日々の業務の中で管理者と職員が意識を高めるように取り組んでいる。	「感謝の心で共に生きる」という独自の理念と4つの信条を作りあげ、玄関や廊下に見やすく掲げている。理念は毎朝、朝礼で職員が読み合わせており、入居者と一緒に分かち合っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所は自治会に加入し催事はもちろんのこと、地域の防災訓練等にも参加して情報共有に努めている。また敬老会には地元の高齢者も招待するなど交流の機会を設けている。	事業者は自治会に加入しており、回覧板が事業所にも届けられ、入居者も地域の一員となっている。年1回の花見や敬老会など地域の行事には入居者と共に参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の防災訓練では、地域の方々に避難訓練時の見学をしていただいた。またその際に認知症のことや支援内容等の説明をすることで、年々認知症に対する理解が深まってきている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は開催回数を2回とし、委員を増員するなど、多くの方々から意見や指導が受けられるよう努めている。会議は事務室でなく、ホール内で開催することで、身近に認知症について理解していただけたと思っています。	会議をホームのリビングで開催してみたところ、ソファへの入居者も会議を見守り、顔見知りの委員との会話もみられた。入居者の様子をDVDにまとめ見てもらうことで、認知症やホームの理解につながっている。	会議は年2回開催しているが、今後回数を増やし、議事内容も工夫して、グループホームの役割を地域に伝え、会議を運営に活用していくことを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	更新申請等提出の際には、郵送せずに直接、市役所の担当課へ出向いて連絡を密に取るよう心がけている。また担当職員とは、電話やメールにより、迅速な情報共有が図れるよう取り組んでいる。	市介護保険係から各種補助金の申請に関する情報提供を得たり、地域包括支援センターを通しての家族の見学会など、積極的に連携を図っており、認知症の理解を広めるために協力しあっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	今年度には、ケース検討を通じて職員会議の中で身体拘束に関するケアのあり方について学習した。また代表者から朝礼時において、適時、身体拘束をしないケアに関する指導をおこなっている。	管理者が身体拘束について研修会で得た情報を職員に伝えている。車椅子による行動抑制や、言葉の拘束についても常に気をつけて、身体拘束をしないケアの実践に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関する外部研修へは、今年度も職員を出席させ、学んだ知識を職員会議や掲示板で報告するなどして、虐待に関する意識啓発に取り組んでいる。		

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	代表者や介護支援専門員、介護主任等には権利擁護に関する理解は持たせているが、全職員に対して制度の理解を周知させるまでには至っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約及び解約時には、必要な書類のほか分かりやすいパンフレット等を用いて、利用者や家族に十分に納得していただけるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的又は必要時に家族へ連絡をとっており、その中で意見や苦情等があれば、迅速かつ丁寧な対応取れるように努めている。また家族の来訪時や文書等を送付し気軽に意見を出してくれるよう伝えている。	入居者の体調の変化等、随時、連絡をとり話し合っており、家族と担当者が話しやすい関係となっている。毎月多くの家族が訪問しており、その際に家族の声を聞くことが多い。	家族の訪問時に意見を聞く場合は、話し合いたい内容をあらかじめ伝えておくなどの配慮も望まれる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定例会議の中で、職員からの意見や提案があれば、積極的に申し出てもらうように伝えている。また管理者自身が朝礼に出席したり現場で職員と話し合うことで、意見が言いやすい雰囲気作りに努めている。	会議や日常の業務の中で、管理者と職員が話し合う機会は多く、意見や提案を管理者に話しやすい体制が整っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	処遇改善交付事業を機会に、職場環境や条件整備に取り組んでいる。正社員については昇給制度を導入することで、労働意欲を高めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業規模的なハンディがあるが今年度も実践者研修に出席させた。勤務形態上、出席数は少ないものの希望者がいれば気軽に出席できるよう配慮している。研修ビデオ等による内部研修も実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	本市には他に同業者がなく、実際に交流できる機会は少ない。代表者は県レベルの連絡会議には積極的に出席して情報共有できるよう努めている。		

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族から離れる不安を理解し傾聴や受容等の相談援助に心がけるとともに、受け持ち職員が本人との馴染みの関係が早く構築できるように、寄り添って重点的に支援するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入荘にあたっては家族の困りごとやニーズを把握するための面談の機会を多く持つようにしている。また入荘後にも必要に応じて、お相いに気軽に連絡を取り合えるよう協力をお願いしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期は、本人の暮らしぶりや言動に十分注意したり、家族との連携を図りながら、各症状に対する理解を深め、一日も早く落ち着いた時間が確保できるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本ホームの理念にも謳っているが、「感謝の心で共に生きる」という姿勢を忘れずに支援するよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	「感謝の心で共に生きる」という意味は、本人・家族・職員・地域によって構成されるので、家族と寄り添いながら本人を支援できるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人や家族からの聞き取りにより、本人が馴染みを感じている、人・物・出来事についてできるだけ多く把握するようにして支援時に生かすよう取り組んでいる。	近隣の入居者が多く、馴染みの人との関係を維持できている。日用品など馴染みの物をホームへ持ち込んだり、馴染みの場所へ外出するなど、入居者の声を聴きながら個別対応を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の性格や嗜好によって、グループ化は避けられないが、職員が適時に声かけをしたり、散歩やレクリエーション等へのお誘いをする事で、一人ひとりの尊厳を大切にした支援をおこなっている。		

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退荘時には家族へは、相談や悩み事があれば対応していくことを伝えている。退荘者の家族や親戚等から近況等についての連絡や手紙をいただくことがある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族からの聞き取りや、普段の生活の中で入居者の言葉や様子から、一人ひとりの思いや暮らしの希望・意向を汲み取ろうと努めている。アセスメントも工夫して、具体的な支援ができるよう取り組んでいる。	事業所で考案したアセスメント用紙を活用してその人らしく暮らせる個別の情報も詳しく記録されており、具体的支援につなげている。特に不穏時のケアの成功例を蓄積し、実践へとつなげている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族からの聞き取りにより、本人の生活史の中でこだわりのある人・物・出来事についてできるだけ多く把握するようにして支援時に生かすよう取り組んでいる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日頃の支援内容や処遇記録等から本人の心身状態の把握をするために、定例会議やミーティング等において意見交換やケース検討をおこなっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の希望を踏まえて、ケアマネジャーを中心にチームで話し合い、入居者がその人らしい生活がおくれるような計画を作成している。	介護計画は聴取した情報をもとに、身体的な面を含めてその人らしい暮らしを支える計画を作成している。3ヶ月に1回、モニタリングを行ない、介護計画の見直しを行っている。	さらに入居者のできること、得意なことを盛り込み、「自信・意欲」の向上を図り「役割」が持てるような計画の作成に期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアの実践等については、処遇記録や申し送り簿により記録している。ケアに関する相談は、適時、職員同志でおこなっており、必要に応じて上司の指示や定例会議で協議している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	地域性や事業規模等の課題はあるが、出来る範囲の中で、多様化するニーズに応えていきたいと考えている。		

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事参加や地域住民との交流を通じて、近隣の方々と外出や散歩時に声を掛け合える関係づくりができるよう努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	希望のかかりつけ医には、家族が受診介助しているが、必要に応じて職員が受診介助することもある。近隣の医療機関は協力が得られにくく、本人の希望・緊急性も配慮して遠方の医療機関を受診している。	希望のかかりつけ医を選択することができ、基本は家族が受診介助しているが、職員が行う事もある。家族が行う場合は、病院宛に情報提供書をホームが用意し、手渡している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	現在、職員に看護師資格者がいない状態である。必要時には、本人のかかりつけ医療機関に相談し指示をうけるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、定期的に訪問し、家族や看護師等から情報を得たりしている。地域医療室との連携がうまく図れるよう、適時、電話や訪問により関係作りに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	該当するケースはないが、職員会議等で話し合いをすることがある。事業所としての対応は決まっていない。	市街地より離れており、訪問看護・医師などの地域的課題があり、家族の協力が得られなければ対応困難な面も多い。重度に対応できる入浴設備がないこともあり、事業所としての重度化や終末期に向けた方針を決めかねている。	事業所の入居者は高齢・重度化傾向にあり、事業所としてできること、できないことを確認・検討し、方針を定めておくことが望まれる。契約時には方針を家族に伝えておくことが望ましい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故発生時の連絡体制を掲示するほか、緊急時の対応マニュアルを周知させている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の防災避難訓練を実施している。毎年、地域の自主防災訓練と合同で実施しており、避難訓練の様子も見学してもらっている。訓練後の話し合いにも参加しており、住民の理解も深まっている。	年1回、住民と合同で火災時の訓練を行っている。参加した住民が、入居者の状況などの大変さを感じたなかで、地域からの協力が得られるよう住民とも話し合われている。	

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員については就業規則における服務規律及び個人情報保護の遵守を徹底するよう指導している。個人データは所定の場所に保管管理するよう指導している。	ホーム内の共有空間でのケアの伝達や会議では、入居者の個人名等、個人情報への配慮をしている。排泄介助時はトイレの戸が開けっ放しとならないようにし、言葉掛けについても気を付けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個人の認知症の症状や程度にもよるが、その人らしい生き方・考え方を尊重して親切丁寧な対応ができるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その人らしさを尊重するとともに、思いや意向を大事にした支援ができるよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしさを尊重するとともに、思いや意向を大事にした支援ができるよう努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	配膳、調理、買物ができる利用者は、職員と自然な形でおこなえるよう配慮している。食事は温かいうちに食べられるよう心がけている。昼食時は数名の職員と一緒に食べながら、利用者様と和んで会話ができるよう雰囲気を作っている。	野菜を刻む音や焼き魚の匂いのなかで、芋の皮むきなど各自のできることを支援している。職員は弁当やカップラーメンを各自持参し、入居者と同じテーブルで談笑しながら食事をし、傍らに立って見守る職員もいる。	同じ食事は入居者との一体感が増し、より入居者を知ることが期待できる。見守りや、薬の配布時は立ったまま見下ろす形でなく、テーブルに座って見守り、配布する配慮がほしい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べやすい大きさを配慮しながら、調理している。そして、それぞれの食べる量の配慮はもちろん、咀嚼力や飲み込み力に「応じて魚をほぐしたり刻んだりと手を加えている。食事量も水分量も毎日チェックしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	その人にあった、口腔ケアや入れ歯洗浄をおこなっている。		

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者様のプライドを尊重し、それぞれが有している能力が維持されるような支援ができるよう努めている。	個別排尿チェック表を作成しており、個人の排尿パターンを把握し、また、入居者のしぐさを見逃さず、さりげないトイレ誘導を行っている。今までの習慣にあわせ、男性便器で排尿できるようにも支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックを行い、便の状態や量も記録している。水分補給に注意を払い、便秘時にははちみつ、牛乳などの提供を心がけている。便秘がひどい場合は、家族と相談しかかりつけの医療機関への受診もおこなう。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	希望すれば毎日でも入浴ができるよう対応している。入浴に際しては、本人の同意と納得を前提としている。	週3回、午後の時間帯に入浴している。夜の入浴は希望者がなく実施されていないが、足浴は行っている。拒否する人には、職員と一緒に入浴したり、近くにある温泉と一緒にいくなどして、入浴できるよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	出来るだけ安心、睡眠がとれるよう支援しているが、夜間眠れなかった場合は、ゆっくりと過ごしていただくよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の体調の変化や異変みられた時は、速やかに看護師に相談し、支持を仰いで対応している。必ず、記録し引き継ぎをおこなっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や出来ることをアセスメントし、話を聴きながら、職員で利用者様一人ひとりの張り合いや喜びのある日々を過ごせるよう話し合いながら、支援をおこなっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出、外泊は本人の体調に問題のない限りは、いつでも可能である。	気候がよい時期になると、入居者のほぼ全員が近くの温泉まで散歩に出かけ、途中に近隣者から声を掛けられることも多い。希望に沿った個別の外出支援はホーム内のケアが手薄にならないように管理者が行うことが多い。	

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者様本人が所持できる人は自分で、そうでない人も家族様より現金を預かり、買い物時に希望があれば買える体制にしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、随時行えるようにしている、手紙の投函の支援もおこなっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室内は木の暖かさを意識して作っている。どの部屋も掃きだし窓であり明るくて外気もよく入る。景色もよく見えるので季節感を持ってもらえると思う。	室内は木の暖かさが満ち溢れ、飾られている小物や観葉植物も家庭的な雰囲気、明るい生活空間となっている。ウッドデッキに通じる動線は、自由な広がりを見せている。横になれるゆったりとしたソファなど、居心地良く過ごせる工夫が随所にみられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングには、ソファ・テレビを置き、気の合う利用者同士で過ごせるよう工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	基本的には、居室は自由につかって頂いている。できるだけ馴染みのある物を使用してもらおうお願いしている。	なじみの物を持ち込み、各自の好みに合わせてその人らしい部屋となっており、希望にあわせて畳を用意することもできる。家族が泊る際はホームで寝具を借りることもできる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーはもちろんのこと、トイレや洗面所は、一般家庭と同じような仕様とし、本人が在宅でいたようなイメージで暮らせるよう配慮している。		